

七尾市とその周辺地域における助詞「いか」

崎 出 愛 夢

1. はじめに

石川県七尾市で生まれ育った筆者とその母親は日常的に「いか」という助詞を多用し、(1)、(2)のように用いる。以下、方言の例文の後ろに標準語訳を示す。

- (1) きのういか、ねとるねこおってんよ。(昨日さ、寝ているねこが居たんだよ。)
- (2) あのひとはさとうさんやろいか。(あの人は、佐藤さんだろうよ。)

(1)の「いか」は文中で用いられ(以下、「文中いか」)、(2)は文末で用いられる(以下、「文末いか」)。これらは間投助詞とみなせる点で共通している一方で、「文中いか」は時間かせぎの談話標識¹を表し、「文末いか」は伝達態度のモダリティ²を表すという点で異なる。「文中いか」、「文末いか」は石川県内に確認された間投的な用法を持つ形態素であるが、同様の機能を有する北陸地方特有のイントネーションとして、「くぼみ音調」(新田1987)が存在し、「間投イントネーション」(山口1985)とも呼ばれる。山口は、「間投イントネーション」の機能として「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話手自身の余裕を保つ」(山口1985, p.216)との見解を示しており、「文中いか」、「文末いか」についてもこれと同様の機能を有していると言える。

本地域において間投的用法を持つ「くぼみ音調」は、これまでも先行研究が存在する一方で、「文中いか」、「文末いか」は筆者の周辺では耳にするものの、さらにはその用法や「くぼみ音調」との違いはおろか、存在さえ知られて

1 廣瀬(2018, p.377)によると、「談話標識」とは、話し手が主に伝達しようとする発話メッセージ[命題内容]の周辺に位置し、聞き手がその内容を正しく理解するように意味解釈の仕方を合図する標識である。」と定義され、本稿ではこれを採用する。また、「時間かせぎ」の談話標識は廣瀬(2015)がwellの用法として指摘したものである。

2 日本語記述文法研究会(2003, p.239)によると、伝達態度のモダリティは、「話し手が発話状況をどのように認識し、聞き手にどのように示そうとしているのかを終助詞によって表すものである。」と定義され、本稿ではこれを採用する。

いない。そこで、本稿では、まず石川県七尾市とその周辺地域で「文中いか」、
「文末いか」について調査を行い、その使用状況について、世代や性別、用法
といった観点から分析を行った。

2. 「文中いか」、「文末いか」の使用実態に関する調査

2.1. 調査方法と調査対象

2022年5月から7月に、「文中いか」、「文末いか」に関する2つの調査を
行った。

まず、「文中いか」、「文末いか」の使用実態、そして使用地域と年代、性別
をおおよそ推定することを目的とした調査（以下、調査1）を行った。調査
方法は、聞き込み及び Google Forms を用いたネットアンケートである。また、
筆者の親族が友人に電話をかけ、その回答を筆者に伝えたものもネットアン
ケートの結果と統合した。

質問項目としては、出身地、性別、年代、それから以下の3つの例文に違和
感があるかどうかという質問をそれぞれ Q1、Q2、Q3 として設定した。例文
は、「文中いか」、「文末いか」を日常的に話す筆者、筆者の母親、および筆者
の友人の内省を基に、文法的に、そして文脈的に違和感のないものとして作成
されたものである。

Q1: 「ねこっていか、かわいいよね。」（ねこってさ、かわいいよね。）

Q2: 「昨日いか、寝とるねこおってんよ。」（昨日さ、寝ているねこが居たん
だよ。）

Q3: 「あの人は佐藤さんやろいか。」（あの人は佐藤さんだろうよ。）

Q1、Q2 は「文中いか」を使用し、Q3 は「文末いか」を使用した例文となっ
ている。

この調査では、聞き込み調査で15名、ネットアンケートで33名の計48名
の回答を得た。ここでは、「文中いか」、「文末いか」の使用実態をより客観的
に調べるために、日常的にそれらを多用する筆者および筆者の母親と何度も
会話を交わすことが相手の方言に影響を与えている可能性を考慮し、筆者およ
び筆者の母親と親しい間柄にある回答者を他の回答者と区別して分析と考察を
行った。

また、例文を用いた設問では回答は3択とし、例文のような「文中いか」、

「文末いか」を周囲が使用している様子を聞いたことがあり、自分自身も使用する場合は「違和感なし」、周囲は使用しているが自分自身は使用しない場合は「違和感あり△」、周囲も自分自身も使用していない場合は「違和感あり」とした。

さらに、同様の調査方法を用いて、より詳細な地域差と性差を明らかにすることを目的とした調査（以下、調査2）を行った。調査2では、使用地域の細分化を図り、出身市町村の項目と品詞に注目して例文を追加した。例文は「文中いか」、「文末いか」が後接する品詞を違えた以下の10項目とした。ここでは、「文中いか」や「文末いか」が後接しやすいかどうかを品詞ごとに調べることをねらいとして、学校文法に基づいた品詞分類を参考に作成した。さらに、調査1で「いか」が女性的であること、さらに類似するものとして「いや」という男性的な表現があるという指摘を受け、「文末いか」の性差に関する詳細な質問項目を新たに設けた。

Q'1: 動詞

めっちゃ鳴くいか、犬がおっていか。（とても鳴くさ、犬がいてさ。）

Q'2: 形容詞

面白いいか、番組あってん。（面白いさ、番組があったよ。）

Q'3: 形容動詞

今日の海は穏やかでいか、よかったね。（今日の海はおだやかでさ、よかったね。）

Q'4: 名詞

昨日いか、寝とるねこおってんよ。（昨日さ、寝ているねこがいたんだよ。）

Q'5: 副詞

ゆっくりいか、歩いてよ。（ゆっくりさ、歩いてよ。）

Q'6: 連体詞

例のいか、問題ってどうなった？（例のさ、問題ってどうなった？）

Q'7: 接続詞

後期もオンライン授業なんじゃないん、いや、うちは知らんけどいか。（後期もオンライン授業じゃないの、いや、わたしは知らないけどね。）

Q'8: 感動詞

ちょっといか、聞いとる？（ちょっとさ、聞いてる？）

Q'9: 助動詞

あの人は佐藤さんやろいか。(あの人は佐藤さんだろうよ。)

Q'10: 助詞

ねこっていか、かわいいよね。(ねこってさ、かわいいよね。)

それぞれの例文に対し違和感があるかどうかという質問を、Q'1 から Q'10 と設定した。また、性差に関しての設問は Q'11 とし、「いか」が女性的で「いや」が男性的であると感じる場合には○を、反対に「いか」が男性的で「いや」が女性的に感じる場合には△を、性差を感じない場合には×と記してもらった。

2.2. 調査結果と考察

2.2.1. 使用地域について

先に述べたように、調査 1 においては計 48 名の回答を得た。そして、調査 2 においては、聞き込み調査で 10 名、ネットアンケートで 20 名の計 30 名から回答を得た。

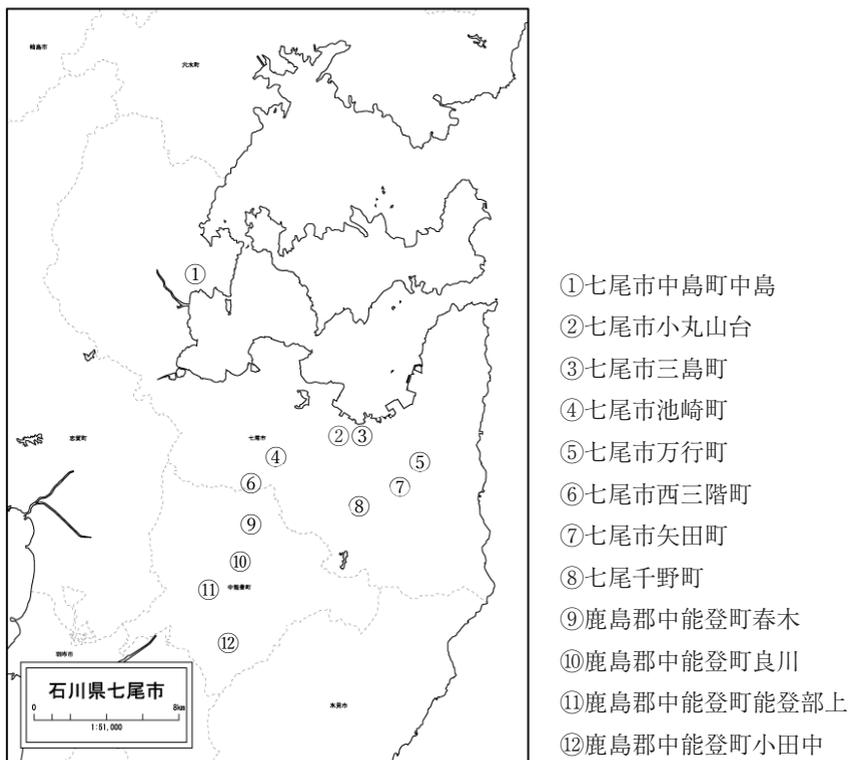
調査 1 において、「文中いか」は輪島市、鹿島郡中能登町、羽咋郡志賀町、七尾市西三階町、七尾市万行町、七尾市矢田町出身の話者で使用が確認された。また、「文末いか」は鹿島郡中能登町、羽咋郡志賀町、七尾市西三階町、七尾市万行町、七尾市三島町、七尾市矢田町出身の話者で使用が確認された。これらの地域を地図上に示したものが図 1 である。なお、以下で示す地域(図 1・図 2)以外での使用を全否定できるほどの調査はできていないので、近隣には他にも使用する地域があるかもしれない。

図1 調査1で「文中いか」、「文末いか」の使用が確認された地域



さらに、調査2では「文中いか」は鹿島郡中能登町小田中、鹿島郡中能登町能登部上、鹿島郡中能登町春木、鹿島郡中能登町良川、七尾市池崎町、七尾市小丸山台、七尾市千野町、七尾市中島町中島、七尾市西三階町、七尾市三島町、七尾市矢田町出身の話者で使用が確認された。「文末いか」は、「文中いか」の使用が確認された話者に加えて、七尾市万行町出身の話者でも使用が確認された。いま挙げた地域を図2に示す。

図2 調査2で「文中いか」、「文末いか」の使用が確認された地域



これらの結果から、「文中いか」と「文末いか」について、鹿島郡中能登町と七尾市がおおまかな使用範囲として推定できた。また、鹿島郡中能登町各地と七尾市各地における「文中いか」、「文末いか」の使用、そしてその二つの地域の境に位置する鹿島郡中能登町春木や七尾市西三階町の使用が確認されたことから、「いか」は少なくとも鹿島郡中能登町と七尾市の連続した地域で使用されているとみて良さそうである。さらに、調査2で特徴的だったのは高階地区³の一部、七尾市池崎町、西三階町で「違和感なし」の回答が多かったことである。西三階町出身の回答者には、母親の中学時代の友人が3人含まれおり、すべての項目において「違和感なし」と回答していることで、40代から50代における「文中いか」、「文末いか」の使用者の割合が高くなっているよ

3 高階地区は、青山町、旭町、池崎町、西三階町、温井町、盤若野町、東三階町、町屋町、満仁町の9つの町で構成されている。

うである（図5も参照）。

2.2.2. 性差について

次に性差については、「いか」は女性的であるということが確認された。実際に、調査1において、男性ではQ1に対する許容度は18.8%（16人中3人）、Q2、Q3に対する許容度はどちらも31.3%（16人中5人）であった。一方で、女性ではQ1に対する許容度は41.9%（31人中13人）、Q2に対する許容度は45.2%（31人中14人）、Q3に対する許容度は約48.4%（31人中15人）であった。また、調査2では「いか」が女性的であり、「いや」が男性的であるという回答が7割以上（30人中23人）を占めたことから、「文中いか」、「文末いか」は、いずれも男性よりも女性に用いられ、許容されやすいという性差が認められた。

2.2.3. 世代差について

最後に、世代差に関しては、筆者が属する10代から20代の若者世代（以下、若者世代）と筆者の母が属する30代から50代の父母世代（以下、父母世代）、および筆者の祖父母が属する60代から70代の祖父母世代（以下、祖父母世代）の3世代に分け、調査1の結果からそれぞれの許容度を比較した。若者世代で「違和感なし」と回答した割合はQ1に対してが22.6%（31人中7人）、Q2に対してが32.3%（31人中10人）、Q3に対してが35.5%（31人中11人）であった。父母世代と祖父母世代の回答は全ての例文に対して「違和感あり」とする人か、全ての例文に対して「違和感なし」とする人の2群に分かれており、「違和感なし」としたのは父母世代で62.5%（8人中5人）、祖父母世代で55.6%（9人中5人）であった。父母世代と祖父母世代では許容度50%を超える結果となった。つまり、許容度は、父母世代、祖父母世代、若者世代の順に高いようだ。

筆者は、「いか」を使用する母親の影響を受けたことで、同世代よりも「いか」を多用しているようである。次に注目すべきは、母が「いか」という語彙を手に入れた過程だ。調査1を行うにあたり、「いか」は祖父母世代から父母世代へ、父母世代から若者世代へと受け継がれたのではないかと考えていた。しかし、母方の祖母が「いか」を聞いたことがあっても実際に使用していないこと、それから祖母の出身地である鳳珠郡穴水町では回答者の全員が「文中いか」、「文末いか」を使用した例文に「違和感あり」や「違和感あり△」と回答

していることから母の「いか」は世代間で受け継がれたものではなさそうだ。「文中いか」、「文末いか」に相当する祖父母世代の方言が見当たらず、調査1、調査2から主に西三階町や池崎町といった高階地区の一部で、父母世代を中心に使用されていることを踏まえると、「文中いか」や「文末いか」は限定された地域、世代で流行した言葉であるという可能性もあるだろう。ここまでの調査結果から、「文中いか」、「文末いか」の通時的な分析は困難であると考えられたため、本稿では共時的な分析を中心に行うこととした。

2.2.4. 後接しやすい品詞について

最後に、調査2の調査結果から「文中いか」、「文末いか」が後接しやすい品詞を検討した。品詞に関する分析を行うにあたって、「文中いか」、「文末いか」に対する後接しやすさの傾向や地域差をつかみやすくするために、「違和感なし」を3点、「違和感あり△」を2点、「違和感あり」を1点として、「文中いか」、「文末いか」の許容度を定義し、回答者ごとの使用許容度、品詞ごとの使用許容度における平均値を算出した。その結果、得点の平均が高い回答者の主な出身地は七尾市と鹿島郡であることがわかった⁴。

以下では、後接する品詞ごとの許容度平均点を棒グラフ化したものを示す。点数の高い順に並び替えたものが図3である。縦軸には許容度を、横軸には品詞を記した。このグラフのデータは七尾市と鹿島郡だけでなく、全地域を含んだものである。

4 さらに、これらの地域において、「文中いか」、「文末いか」が後続する品詞に差がみられるのではないかと考え、七尾市のデータと鹿島郡のデータを比較した。ここで、各地域において品詞ごとに許容度の平均値を求めたところ、Q'8（感動詞）において七尾市で2.14点、鹿島郡で1.40点となり、品詞の中で最も平均値の差が大きくなった。この結果から、七尾市では比較的「文中いか」や「文末いか」が感動詞に後接しやすく、反対に鹿島郡では後接しにくいという地域差があることもわかった。

図3 品詞ごとの許容度の平均値



次に年代別に比較を行うために、世代別に同様の集計を行いグラフを作成した。

図4 若者世代における品詞ごとの許容度の平均値

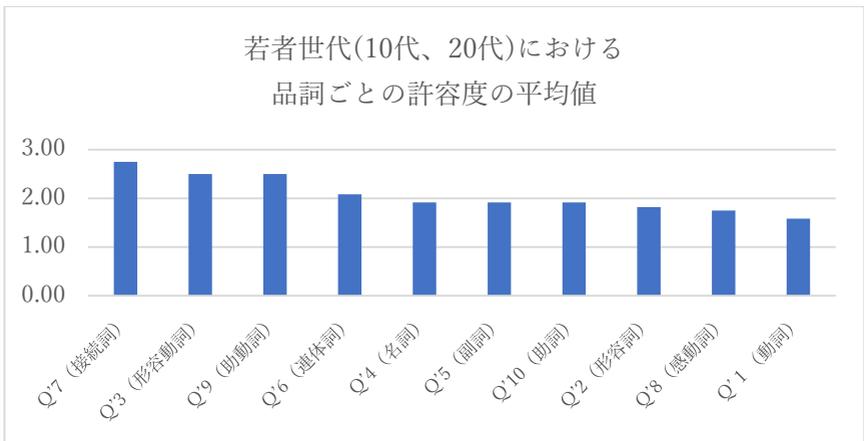


図5 父母世代における品詞ごとの許容度の平均値

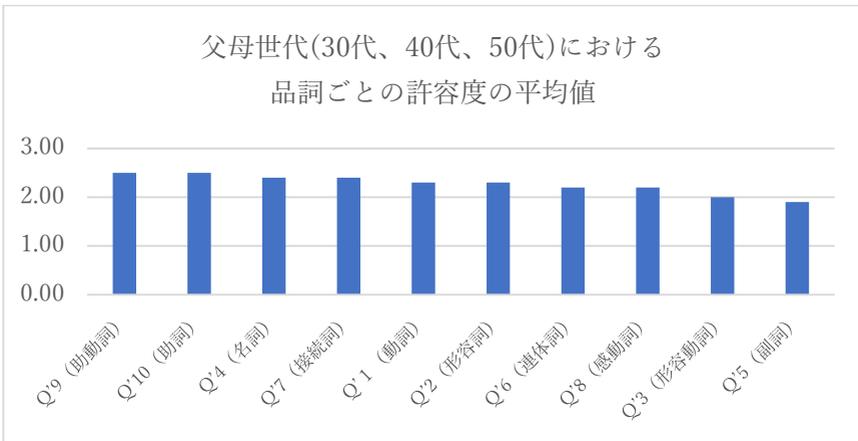
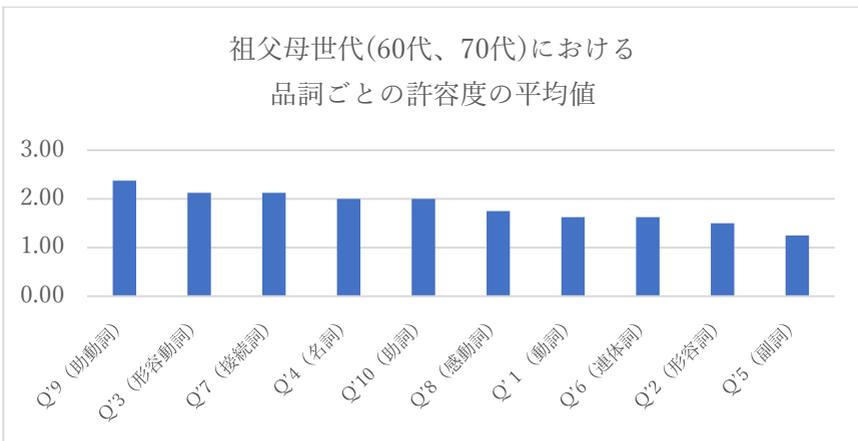


図6 祖父母世代における品詞ごとの許容度の平均値



若者世代では、後接しやすい品詞は調査1と似た傾向が見られた。調査1では、若者世代が「違和感なし」と回答したものとして、 $Q3 > Q2 > Q1$ の順に許容度が高いことを述べた。調査で使用した例文Q1、Q2、Q3は、調査2でそれぞれQ'10、Q'4、Q'9としてそのまま使用したことを踏まえると、「文中いか」、「文末いか」に後接しやすい品詞の順が $Q'9 (Q3) > Q'4 (Q2) = Q'10 (Q1)$ となっており、両調査において後接しやすい順が概ね一致した。そして、調査1では父母世代、祖父母世代ともにQ1、Q2、Q3の許容度の差は確認出

来なかったが、調査2では後接しやすい品詞の差が明らかになった。父母世代では $Q'9 (Q3) = Q'10 (Q1) > Q'4 (Q2)$ の順で許容されやすく、祖父母世代では $Q'9 (Q3) > Q'4 (Q2) > Q'10 (Q1)$ の順で後接しやすいようだ。

次に、世代別に後接しやすい品詞上位5つを比較してみると、全世代共通で「文中いか」、「文末いか」が名詞、接続詞、助動詞に後接しやすい一方で、形容詞、副詞、感動詞には後接しにくいことがわかった。実際に、世代別に点数の高い上位二分の一と、点数の低い下位二分の一に注目すると、各世代とも $Q'4$ (名詞)、 $Q'7$ (接続詞)、 $Q'9$ (助動詞) が上位に属している一方で、 $Q'2$ (形容詞)、 $Q'5$ (副詞)、 $Q'8$ (感動詞) が下位に属している。

後接しやすい品詞とそうでない品詞には、それぞれ「文中いか」、「文末いか」に接続する理由、接続しない理由が存在すると考えられる。例えば、「文中いか」、「文末いか」が後接しやすい名詞は、品詞の性質上、主題としてとりたてやすい。接続詞は、その後に文が続くことが予想される品詞である。どちらの品詞の性質も「文中いか」の間投的な用法を取り入れやすいものとなっている。助動詞に関しては、「文末いか」が伝達態度のモダリティを表すという点で終助詞の用法を持っているため、「文末いか」が結びつきやすくなっているのではないかと考えられる。

反対に、「文中いか」、「文末いか」が後接しにくい品詞として、形容詞や副詞が浮かび上がった。これらが後接しにくい理由は二点考えられる。一点目は、形容詞と副詞は修飾機能を有するために後続する被修飾語との結びつきが強く、任意性の強い形態素である「文中いか」が排除されうるためである。二点目は、それらの品詞を使用した文脈で間投的な機能を果たすものとしては、「文中いか」よりも「くほみ音調」が選択されやすいのかもしれない。つまり、修飾語と被修飾語の間に「文中いか」という形態素を挿入するよりも、「くほみ音調」を用いた方が形態統語的に修飾関係がわかりやすいということである。また、感動詞については、感動詞の後に文の切れ目が生じていることや、切れ目が生じた後に新しい文が始まるまでの間、聞き手の注意を話者に引き付けておくという機能が重複するため、「文中いか」が後接しにくいのではないかと考えている。

3. 「文中いか」、「文末いか」の品詞と用法

3.1. 調査方法、調査対象

次に、「文中いか」、「文末いか」の品詞を推定することを目的として、対象

地域を七尾市に限定して調査を行った。調査1および調査2では、「文中いか」、「文末いか」の標準語訳として「さ」や「ね」といった間投助詞を充てていたことからわかる通り、筆者は「文中いか」、「文末いか」は間投助詞の一つであると仮説を立てて、A1～A5と名付けた5項目による調査に取り組んだ。新たな調査では、この仮説の検証を目的として、「文中いか」を使用した「昨日いか、寝とるねこおってんよ。」という一文を提示し、回答者に標準語訳をさせた(A1)。そのあと、「文末いか」を使用した「後期もオンライン授業なんじゃないん、いや、うちは知らんけどいか。」という方言の一文に「後期もオンライン授業なんじゃないの、いや、私は知らないけどね。」という標準語訳をつけ、訳として違和感がないかどうかを問い(A2)、違和感があればどのような訳が適当であるかを尋ねた(A3)。最後に、「あの人は佐藤さんだろうよ。」という標準語を方言訳する作業(A4)も行わせ、回答の方言訳に「文中いか」、「文末いか」のいずれかが出現した場合には、それらを省略しても文は成り立つかどうかを質問した(A5)。

3.2. 調査結果

調査の結果、ネットアンケートにて8名から回答を得た。回答者8名のうち、「昨日ね、寝てるねこいたんだよ。」と「昨日さー寝てるねこいたよ。」の2名が「文中いか」に対して、間投助詞「ね」や「さー」を用いて訳を行った。その一方で、「昨日、寝ているねこがいた。」のように、とりたてて「文中いか」を標準語訳に反映させていない回答もあった。次のA2では、筆者が用意した標準語訳に対し、回答者全員が適当であると回答した。A4では、1名が「あのいか佐藤さんやん。」のように「文中いか」を使用し、2名が「あの人は佐藤さんやろいか。」、「あの人は佐藤さんやわいか。」のように「文末いか」を使用していた。他には、「あの人は佐藤さんやろいね。」、「あの人佐藤さんじゃないがいけ?」と答えた2名が「文末いか」と同様の意味を持つと考えられる「いね」、「いけ」を文末に使用していた。そして、その全員が方言訳において「いか」、「いね」、「いけ」が省略可能であると回答した。

3.3. 品詞の推定

方言訳、標準語訳の双方とも回答者によって訳の仕方、「文中いか」、「文末いか」の反映にばらつきがみられた。このように「文中いか」、「文末いか」が標準語訳、方言訳に影響を及ぼしていないこと、「文中いか」、「文末いか」や

それに相当する「いね」や「いけ」を省略しても文の意味が変化しないことを踏まえると、「文中いか」、「文末いか」は必ずしも文脈に組み込まれる必要のないものであるということがわかる。この性質は、節中、節末に任意で現れる間投助詞と同様のものである。また、「文中いか」、「文末いか」共に、間投助詞の「聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示す」（日本語記述文法研究会 2003, p.260）機能や、「間投イントネーション」の「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話手自身の余裕を保つ」（山口 1985, p.216）機能と同様の機能を有していると判断してもよいと考える。これらのことから、「文中いか」、「文末いか」は間投助詞であり、七尾市とその周辺地域に存在する方言の一つであると言えるだろう。

筆者が「いか」が生起する位置で「文中いか」、「文末いか」と呼称を変えていたのは「文末いか」が終助詞である可能性を考慮していたからであった。しかし、前段では双方が間投助詞であると結論づけた。それでは、なぜ「文末いか」を終助詞ではなく、「文中いか」同様に間投助詞と判断したのか、以下にその理由を記述する。まず、言及しておきたいのは、「文末いか」が間投助詞か終助詞かを判断するにあたって、筆者はそれら2つの助詞を区別する立場をとっていることだ。大江（2017）が執筆した、間投助詞と終助詞を比較し、間投助詞の位置づけを見直す論文を参考に、「文末いか」の可能性について探っていく。論文中で、大江は「統語的地位」、「任意性」、「相互作用性」、「人物像」の4点から間投助詞と終助詞の差異を見出している。今回は、「文末いか」が節中に現れないことを考慮して「統語的地位」を除く3点について考えていく。例えば、「任意性」においては、対人的な意味・語用のレベルでは終助詞が強く要請される場合がある一方で、「間投助詞がないと不自然になる文脈」は想定できないと論じている。これに準じると、間投助詞同様に「文末いか」が必ず要請される文脈は想定できない。(3)、(4)のようなやり取りの中で、文末にあってもなくても構わない、「文末いか」は非常に任意性が高いものであると言える。

(3) A: あのひとはさとうさんやろ {いか/〇}。(あの人は佐藤さんだろう {よ/〇}。)

(4) B: そうやわ {いか/〇}。(そうだ {よ/〇}。)

次に、「相互作用性」⁵については、間投助詞は終助詞より相互的なやり取りが必要とされる。大江の論に従えば、「文末いか」が相互作用性を備えていない助詞、つまり終助詞であれば独話の場面を想定した(5)は成立するはずである。

(公園にいる犬を見て独り言で)

(5) *いぬはかわいいわいか。(犬はかわいいな。)

しかし、実際は不自然さが生じる非文であり、ここでも間投助詞の特徴が当てはまる結果となった。

「人物像」では、間投助詞と終助詞で想起される人物像が異なるものとは異なるものがあると指摘されている。さらに、双方の助詞で想起する人物像に差があるものについては、間投助詞と終助詞を区別する必要がある、人物像に差がない場合には区別する必要がないと述べている。2.2.2節で触れた通り、文中と文末という生起する場所に関わらず、「いか」は女性と、「いや」は男性と結びつく点で役割語⁶でもある可能性を踏まえると、「いか」や「いや」は間投助詞と終助詞を必ずしも区別する必要がない。しかし、任意性や相互作用性といった観点から今回は間投助詞と終助詞を区別し、「文末いか」を間投助詞と判断して良いのではないかと考える。

3.4. 用法の推定

「文中いか」、「文末いか」の品詞は間投助詞であるという点で共通している一方で、「文中いか」と「文末いか」の用法はそれぞれ異なっているのではないかと考えられる。ここからは、調査や分析を行っていないため客観性に欠けるが、筆者の言語的直観に基づいて、「文中いか」と「文末いか」の用法について記述しておきたい。まず、用法の差異について説明する前に「文中いか」と「文末いか」の用法には、談話中でなければ使用されないという共通点があ

5 先行研究(梅原1989、半藤2001、など)において、明らかになった間投助詞・終助詞の特徴づけに対して大江が仮に名付けた呼称。

6 本稿の「役割語」は金水(2003, p.205)による、「ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができる」と、あるいはある特定の人物を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる」とき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」という定義を採用する。

ることを指摘する。つまり、「文中いか」と「文末いか」は独話を想定した場面で使用されることがない。実際に、その場面を想定して、「文中いか」を使用した例文を(6)として挙げた。「文末いか」を使用した例文については、3.3節で「文末いか」の「相互作用性」について言及した際の例文(5)を参照されたい。その結果、(5)と(6)はいずれも非文となり、「文中いか」、「文末いか」が独話の際に使用されないことがわかる。

(晩御飯の献立を考えている際に独り言で)

(6) * しょうゆっていか、あったよな。(醤油ってさ、あったよな。)

次に、「文中いか」の用法について詳しく見てみよう。「文中いか」を使用した場合とそうでない場合を以下の(7)に示した。

(7) きこのうのテスト{いか/〇}、てんすうわるかってんよね。(昨日のテスト{さ/〇}、点数が悪かったんだよね。)

筆者の直感に基づくと、「文中いか」が使用されている場合には、続く言葉を探している様子や歯切れが悪い感じが感じられる。ここで、文脈に反映されたニュアンスは、「時間かせぎを表す well」(廣瀬 2015)と同じ機能を果たしているのではないかと考える。廣瀬は、「時間かせぎを表す well」について「しばしば自らの談話調整を打ち出すことへの「ためらい」や「躊躇」を表し、「熟慮中である」ことを示唆する。」(廣瀬 2015, p.16) 他、「まだこの先自分の発話順番を維持し、言葉を続けようとしていることも合図している。」(同項)と述べている。これらの用法は「文中いか」を使用した文脈にも当てはまり、「文中いか」が well 同様に時間かせぎを表す談話標識であると判断してよいと考えている。

最後に、「文末いか」の用法について、3.3節で品詞を特定する際に使用した(3)の例文を用いて説明する。改めて例文を下に示した。

(3) A: あのひとはさとうさんやろ{いか/〇}。(あの人は佐藤さんだろ{よ/〇}。)

(3)の例文で「文末いか」を使用しない場合、ある特定の人を指して、単に

その人が佐藤さんであることを推測して指摘しているような文脈になる。一方で、「文末いか」を使用した場合は、ある特定の人を指し、その人は誰がどう見ても佐藤さんであることを指摘しているような文脈となる。さらに、句末にプロミネンスを置くことで、佐藤さんだということに気づいていない聞き手を非難する文脈を作ることもできる。これは、「その文が表す内容を、聞き手が知っているべき情報として示すという伝達態度を表す」（日本語記述文法研究会 2003, p.242）という終助詞「よ」と同様の用法である。「文末いか」を使用することで生じる聞き手を非難するニュアンスについても、「当然知っているべきことを知らない聞き手に対する非難や皮肉を表す文に「よ」が付加されて、このニュアンスを強めることがある。」（日本語記述文法研究会 2003, p.243）という終助詞「よ」の用法と一致する。日本語記述文法研究会（2003, p.239）において、「話し手が発話状況をどのように認識し、聞き手にどのように示そうとしているか」という伝達態度のあり方は伝達態度のモダリティと呼ばれ、通常、終助詞によって表される。伝達態度のモダリティは非対話的な文として独話でも用いられる一方で、対話的な性質を強く持つ終助詞によって、独話や心内発話として用いられないものも存在する。以上、標準語の研究成果を踏まえて援用すると、方言の「文末いか」は伝達態度のモダリティを表す終助詞相当の機能を持ち、特に対話的な性質の強い間投助詞だと考えられる。

これまでの分析および考察をまとめると、筆者は「文中いか」、「文末いか」の品詞は間投助詞であると判断した上で、それぞれの用法は異なると考察した。つまり、「文中いか」は、主に「時間かせぎ」を表す談話標識としての機能を、「文末いか」は伝達態度のモダリティを表す終助詞相当の機能を持っているのではないかと考える。

4. 「文中いか」と「くぼみ音調」の共起に関する調査

これまで、「文中いか」、「文末いか」と同様の機能を持つ音調として「くぼみ音調」を紹介した。これは筆者にとってもなじみが深く、実際に「文中いか」、「文末いか」の調査を進めていく中で幾度も耳にした音調である。これまでの記述で「文中いか」と「文末いか」の品詞が間投助詞であると結論付けたことを踏まえ、間投助詞である「文中いか」と「くぼみ音調」の共起の有無について調査を行った⁷。

7 新田（1987）は「くぼみ音調」が文末に現れる可能性として、倒置や省略により「くぼみ音調」が現れ得る文節が文末に立った場合、断定の助動詞やを伴う場合を指摘した。

4.1 調査方法、調査対象

調査は、2022年10月下旬頃に筆者と母親の日常会話の録音を行った。談話中に「文中いか」が使用された箇所、それから「くぼみ音調」が使用された箇所を抜き出して、音声分析用のフリーソフトウェア「Praat」を用いて分析を行った。「文中いか」と「くぼみ音調」の共起に関する調査の結果を記述する前に、本調査で録音出来た「くぼみ音調」単独での分析結果と「くぼみ音調」に関する先行研究を用いて、当該音調の特徴について説明する。

4.2 先行研究の紹介

1節で触れた通り、北陸地方には「くぼみ音調」（新田1987）や「間投イントネーション」（山口1985）と呼ばれる特有のイントネーションがある。新田（1987）は、録音資料と自身の内省を基に「くぼみ音調」の調査、分析を行った。対象地域は福井県丹生郡織田町笈松、福井県武生市下中津原町、福井市、金沢市の4つの地域である。新田ははじめに、金沢市方言を除く3方言の事例からわかったこととして以下の3つを指摘している⁸。

- (i) この音調が現れるところは、諸説のとおり長音化するが、各方言ともその長さは最大2モーラ分で、その範囲内で長音化する。
- (ii) 各方言において、この音調について共通するものは、末尾の長音の上に被さった音調のわずかなくぼみである。
- (iii) 音調のくぼみを形成する直前に大きな下降のある場合とその下降がない場合がある。

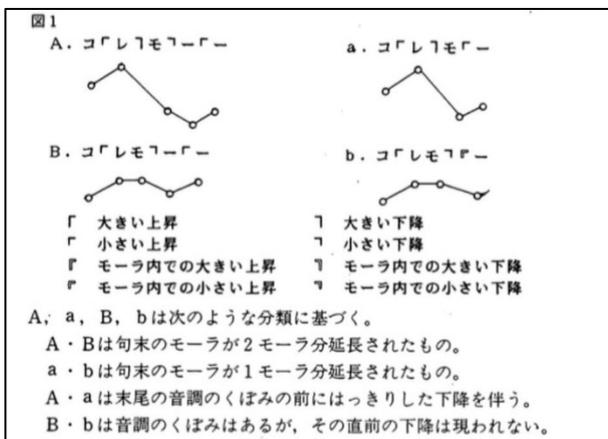
（新田1987, p.20）

そして、これら3つの指摘から「くぼみ音調」をA、a、B、bの典型的の4タイプに設定した。以下の図7は新田の論文中で示された4タイプの特徴である。

しかし、筆者の言語直感では、いずれの場合も「くぼみ音調」と「文末いか」の共起が想定できなかったため、ここでは「文中いか」と「くぼみ音調」の比較のみ行った。

8 (i)、(ii)については金沢方言にも当てはまる。（新田1987）

図7 新田（1987）で示された「くぼみ音調」の4タイプ



(新田 1987, p.20)

新田によると、「ABとabは実のところははっきり区別できるものではない。」と指摘していることから、以下ABにはabも含むこととする。

七尾市出身である筆者が発話した「くぼみ音調」の分析を行ったところ、図7のBタイプに当てはまったため、今回は実際の音声分析の結果に基づき、特にBタイプの「くぼみ音調」の特徴について記述を行った。筆者が発話した「くぼみ音調」の音声进行分析した結果が図8である。また、音調の特徴をより明確に理解しやすいよう「くぼみ音調」が現れていない箇所も音声分析を行い、その結果を図9として記した。

図8 筆者が「くぼみ音調」を発話した例

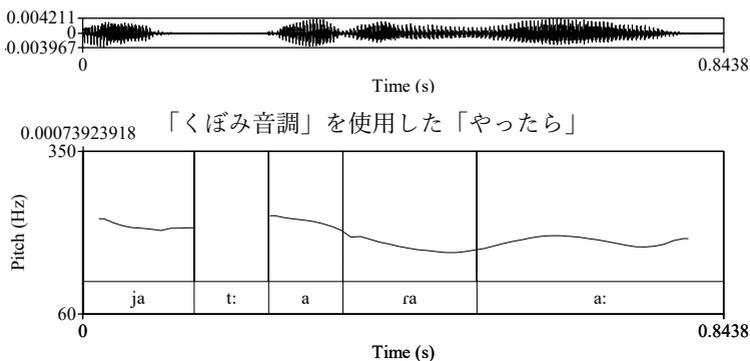
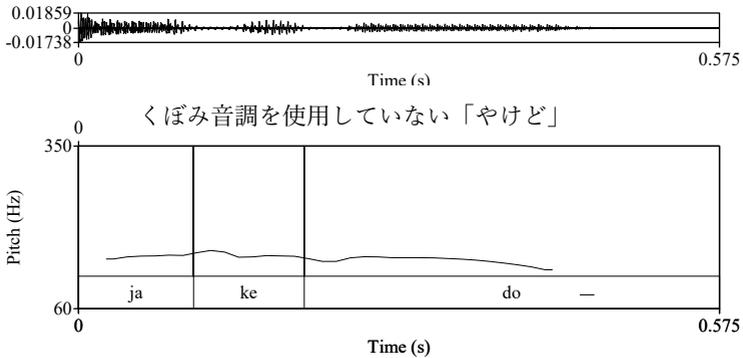


図9 筆者が「くぼみ音調」を発話していない例



それぞれ上図では音声の波形を表し、下図では実線を用いてピッチを、IPAを用いて発話内容を記している。図8では4モーラの「やったら[jat:ara]」の、句末の母音[a]が2モーラ分延長され、くぼみを形成して計6モーラとなっている。そのくぼみの直前は図7で示したBタイプのような比較的緩やかな下降であった。新田は、金沢市において使用されているくぼみ音調についてもBタイプと結論付けると同時に、金沢市では「くぼみ音調」と間投助詞の共存を認めている。それでは、本稿で取り扱った間投助詞「文中いか」についても、「くぼみ音調」と共存しているのかどうか、その実態を調査することとした。新田は論文中で、間投助詞ネを例として挙げ、「くぼみ音調」と間投助詞の共起には、「くぼみ音調」を行ったあとに間投助詞ネを添えるものと間投助詞ネそのものに「くぼみ音調」を被せる2パターンがあり、後者は前者よりも古いものであると指摘している。筆者の言語的直観から前者のパターンの共起は全く考えられなかったため、今回は間投助詞「文中いか」そのものにくぼみ音調を被せる後者のパターンがあることを想定して調査と分析を行った。4.1節の手法で筆者の母が発話した「文中いか」を録音し、音声分析を行った結果が図10、図11である。

図 10 筆者の母が「文中いか」を発話した例 1

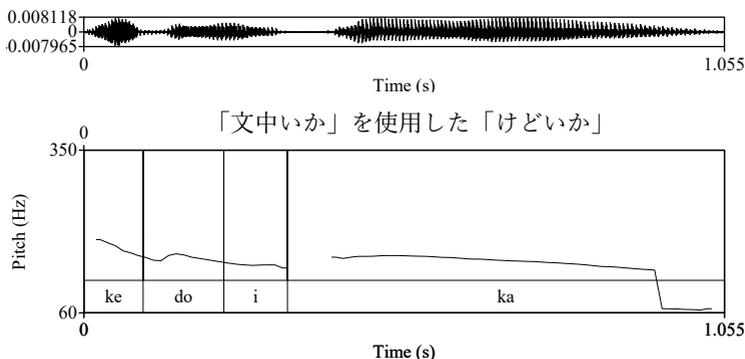
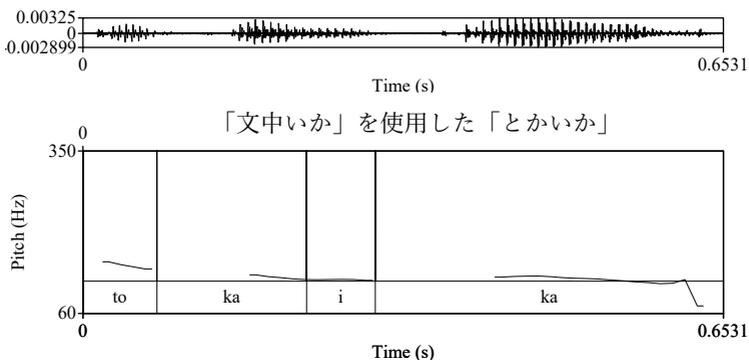


図 11 筆者の母が「文中いか」を発話した例 2



4.3. 調査結果と考察

録音することができた前節の2つの「文中いか」(図 10、11)は共に句末が長音化しているものの、どちらからも「くほみ音調」が確認されなかった。図 10 では、句末にピッチの僅かに上昇しているが、この音声は、現代風なデザイン卒業袴を見て、「70 万円出してまで親は買わんけどいか、そうやる。」(70 万円出してまで親は買わないけどね、そうでしょ。)という文から切り出されたものであることを考慮すると、筆者の母が筆者に同意を求めたために上昇イントネーションが用いられたと考えられる。結果、今回の調査では間投助詞「文中いか」と「くほみ音調」の共起は認められなかった。

共起しない要因が、間投助詞「文中いか」そのものをゆらす現象が古い形で

あるからなのか、「文中いか」と「くほみ音調」が元々共起しないもの同士であるためかは明確にわからない。しかし、筆者は後者の立場をとるのが良いと考えた。間投助詞「文中いか」と「くほみ音調」は同じ機能を持っているため、発話の際に共起する必要がないのではないかと考える。

5. まとめと今後の課題

本稿では、石川県七尾市とその周辺においてこれまで報告されていなかった「文中いか」、「文末いか」について、使用が確認された地域や年代、性差の他その品詞や用法について調査を行った。調査の結果をまとめると、「文中いか」、「文末いか」は七尾市から鹿島郡中能登町の連続的な地域での使用が確認され、30代から50代の父母世代で最も使用されていた。特に、西三階町では使用率が高い結果となったが、その地域の回答者に筆者の母親および母親の友人が含まれていたため、より客観的な分析はできなかった。そして、「いか」が女性をイメージさせる役割語ともなりうるものであり、その他に「いや」や「いね」といった「いか」と同様の意味用法を持つと推測できる言葉が存在することも確認できた。さらに、「文中いか」と「文末いか」は間投助詞であるという点で共通しているが、「文中いか」は「時間かせぎ」の談話標識であり、「文末いか」は伝達態度のモダリティを表す終助詞的な用法を持つという点で異なっていることがわかった。また、そのような差異が後接する品詞に影響を及ぼしていること、「文中いか」が「くほみ音調」と共起しないことが判明した。

本稿では、聞き込み調査とネットアンケートを併用した点、調査によって回答者の人数にばらつきがあるという点で調査が不十分であった。今後、調査範囲を広げるとともに、対象地域ごとに回答者の数を決めて聞き込み調査を行えば、より正確なデータが収集出来ると思われる。本稿で取り扱った「文中いか」、「文末いか」の通時的な調査と分析においては、「文中いか」や「文中いか」を使用する地域としない地域の差異、その背景などの問題点が多数残されている。それらの問題を解決するために、「文中いか」、「文末いか」の共時的な側面についてもさらなる調査が求められる。

【謝辞】

本論文を執筆するにあたり、丁寧なご指導をいただきました担当教員の小川晋史准教授、また調査に協力していただいた皆様に感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

げます。

参考文献

- 梅原恭則 (1989) 「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体 (上)』302 頁—326 頁、明治書院
- 大江元貴 (2017) 「間投助詞の位置づけの再検討: 終助詞との比較を通して」、『語用論研究』第 19 号 90 頁—99 頁、日本語用論学会
http://pragmatics.gr.jp/content/files/SIP_019/SIP_19_Ooe.pdf (最終閲覧日 2023/03/11)
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、岩波書店
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』239 頁—274 頁、くろしお出版
- 新田哲夫 (1987) 「北陸地方の間投イントネーションについて」、『金沢大学文学部論集 文学科篇 7 巻』19 頁—48 頁
https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1717&file_id=26&file_no=1 (最終閲覧日 2023/03/11)
- 半藤英明 (2001) 「間投助詞から「表情詞へ」—終助詞と間投助詞のカテゴリ—再編—」、『静岡英和女学院短期大学紀要』33、45 頁—56 頁
- 廣瀬浩三 (2015) 「Well の感覚」、『島根大学外国語教育センタージャーナル』(10) 1 頁—26 頁
<https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/31496> (最終閲覧日 2023/01/10)
- 廣瀬浩三 (2018) 「談話標識をよりよく理解するために」368 頁—379 頁、『ことばのパースペクティブ』、中村芳久教授退職記念論文集刊行会編
- 山口幸洋 (1985) 「福井方言の間投イントネーションについて」、『音声の研究』第 21 集 213 頁—222 頁、日本音声学会
- 白地図専門店、石川県の白地図
<https://www.freemap.jp/item/ishikawa/ishikawa.html> (最終閲覧日 2023/03/11)
- 白地図専門店、七尾市の白地図
<https://www.freemap.jp/item/ishikawa/nanao.html> (最終閲覧日 2023/03/11)
- 七尾市高階地区の情報発信サイト、高階地区について
<http://takashinacomcen.com/about/> (最終閲覧日 2023/03/11)
- Boersma, P., & Weenink, D. (2022) . Praat: Doing phonetics by computer [Computer program] . Version 6.2.23, retrieved 8 October 2022
<https://www.fon.hum.uva.nl/praat/> (最終閲覧日 2023/03/11)